

古文 識別これだけ100

迷ったら、まずこの100個。

テストまで時間がないときは、ここだけやればいい。

使い方 右の空欄に答えだけ書きます。1問10秒。

全部で100問。第1章の46問だけでも、まず一周してください。

この100個の選び方 誰でも古典塾の無料ドリル（約6,400問）から、入試・定期テストで実際によく問われる形だけを選び直しました。

同じ語でも用法がひと通り入るように配分しています。

まちがえたら その語の解説記事に戻ってください。1問ずつの「決め手」は解答編にあります。

「ぬ」

- 1 月の明かき夜、はかなく更けぬ。
- 2 我が思ふ人は来ぬらむ。
- 3 来ぬ人を待つ宵の更けゆけば。
- 4 在原業平の歌、忘れぬものを。
- 5 夜深くぬれば、夢のごとし。
- 6 死ぬる命の惜しからず。

「ね」

- 7 問へど答へねば、いと怒れり。
- 8 わが袖は、人こそ知らね、乾く間もなし。
- 9 この文、はや読みね。
- 10 急ぎ往ねかし。

「なり」

- 11 名にし負ふ都鳥にてあるなり。
- 12 古き友、なほ生けるなりけり。
- 13 月の都の人なりけり、と申す。
- 14 心ある人なりしが、いま見えず。
- 15 嵐の音、いまだ止まずなり。
- 16 奥山に、鹿ぞ鳴くなる。
- 17 帝、御殿の内におはすなり。
- 18 海面、なほ平らかなり。
- 19 心ある人にて、いとあはれなりける。
- 20 嵐山の紅葉、見る人多くなりぬ。

「に」

- 21 心にかかれども、口に出さず。
- 22 行く春に惜しまるる人。

23 物のあはれを知らぬ人にもあらず。

24 我は男にこそありけれ。

25 雨降るに、なほ来たる人なし。

26 ことば多きに、心せばし。

27 春過ぎて夏来にけり。

28 雪降り出でにけり。

29 庭の様子いとあやしげに梅の花…

30 死にたる人。

「る・らる」

31 我が宿の梅、知る人に折らる。

32 愚かなる振る舞ひ、人に笑はる。

33 帝、その歌をいたくめでらる。

34 大納言、いとうつくしと見らる。

35 恥づかしくて、ものも言はれず。

36 昔のこと、ふと思ひ出でらる。

「る・れ」

37 池の面に、月の影うつれるを見る。

38 軒端に咲ける梅の香、いとなつかし。

「ば」

39 鏡に色・形あらば映らじを。

40 あらばあれ、なくてもありなむ。

41 世の中を厭はば山に入れ。

42 病重ければ起きも上がらず。

43 人間へばありのままに語る。

44 時来れば花おのづから開く。

45 雨の降れば、え出で立たず。

46 花の散るをば惜しむ。

「し」

- 47 月の都に住みし人にやあらむ。
- 48 我ぞ知る、唐土に渡りし人。
- 49 思ひしことを書きとめぬ。
- 50 我のみし怒り、人は笑へり。
- 51 我し思へば、なほ恋し。
- 52 行幸したまひしことあり。
- 53 ありがたしと人みな申しけり。
- 54 春雨降りしかど、花散らず。

「なむ」

- 55 我が君もすこやかにおはせなむ。
- 56 子もすこやかに育たなむ。
- 57 鳥のこゑなむいとあはれなる。
- 58 あはれ世の中なむかなしき。
- 59 言ひなむとすれど、声出でず。
- 60 涙の落ちなむを、人に見られじ。
- 61 人もこそ来め、我れも往なむ。

「な」

- 62 思ひ初めなば、苦しからむ。
- 63 暮れなむとすれど、帰らず。
- 64 あはれと思へ、人なしらせそ。
- 65 ほととぎすな鳴きそ鳴きそ。
- 66 あなかま、もの言ふな。
- 67 はかなき夢を見つるな。

「て」

- 68 都を発ちて幾日になりぬらむ。

69 歌一首、詠みてけり。

70 京にて生まれ、奈良にて育つ。

「で」

71 言（こと）問はで過ぎにけり。

72 聞かでやみにしことの悔しさよ。

73 なかなか言はでやみにしを。

「が」

74 いみじき人が、また気高き人。

75 君が御志ありて、世に伝はる。

76 木の葉散るが、なほ風吹かず。

「の」

77 黒き雲の、にはかに出で来て。

78 都の空を、なほ恋しく思ふ。

79 いと小さき鳥の、梢にゐたる。

「べし」

80 我れ歌を詠むべきことを思ふ。

81 真夜中に物音、何ぞあるべき。

82 我れもまた、その道を行くべし。

83 川深くして、渡るべからず。

84 雪降れば、雪靴を履くべし。

「らむ」

85 旅人は今、どこへ向かふらむ。

86 いかでこの音を聞き給ふらむ。

87 いまごろ山に響くらむ鐘の音。

「けむ」

88 昔の人、いま何処へ行きけむ。

89 いかによりし世にやありけむ。

「たり」

90 我れ歌詠みたるを、人皆称ふ。

91 風吹きたれば、舟漕ぎ出でぬ。

92 武士たりしが、いま俗にあり。

93 我れ仏徒たれば、戒律を守る。

「にて・とて・して」

94 ある男、宮にて仕うまつる。

95 二人しておもしろき歌詠む。

96 「世を捨てむ」とて山に入る。

97 いと幼き子にてまだ物言ふべきほどならず。

「給ふ」

98 親王（みこ）、馬に乗り給ふ。

99 「げに、見給ふるに、いとあはれなり」と言ふ。

100 帝、御衣（おんぞ）を脱ぎて給ふ。
